

# AJELC Newsletter



第60号 2020年10月31日

		---目 次---			
巻頭言	江連 敏和	1	特集1：コロナ禍に	新谷 真由	8
会長断想	小川 貴宏	2	おける授業運営	横田 葉子	9
名誉会長随想	奥津 文夫	4	特集2：近況報告	池田 和夫	10
参与随想	森住 衛	5	座談会：遠隔授業	木村 郁子	12
	村田 年	6	における工夫	瀬上 和典	13
			事務局だより		16

## 将棋棋士 藤井聡太二冠の言葉

江連 敏和

このたびは巻頭言への貴重な執筆機会を賜り、御礼申し上げます。藤井聡太二冠の言葉を考察します。

2020年8月20日、藤井二冠が王位のタイトルを奪取した。翌日、彼はインタビューに応じる。将棋以外でやりたい事を問われ、PCを「買いたい」と答えた、とある記事は伝えた<sup>注1)</sup>。しかし「組みたい」と報じた記事<sup>注2)</sup>もある。

PCを「買う」と「組む」では、異なる人物像を想起させる。「買う」のであれば、量販店などで既存の物を購入する。「組む」のであれば、専門店で各パーツを、用途や嗜好に合わせて選択し、完成させる。英語でも同様だろう。“I would like to purchase a PC.”と“I would like to build my own PC.”では、私は異なる人物像が思い浮かぶ。

藤井二冠は人工知能を活用した将棋の研究に余念がないと聞く。戦況判断など複雑な作業には、一般用PCには搭載しない高性能部品が必要である。実際、彼は特別な部品の購入を検討している<sup>注3)</sup>。故にPCを「組みたい」からは、より高度な研究機器を製作し、棋士としての職能向上を目指すことが読み取れる。一方、PCを「買いたい」では研究環境の改善を意味しない。そのため、彼が余暇も将棋に没頭している文脈につながらない。

この例は私には、改めて言葉を考察する契機となった。今後も細かな差異に敏感でありたい。

注

1) 藤井聡太二冠「王位」奪取の記事 (NHK) <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200>

[821/k10012576861000.html](https://www.youtube.com/watch?v=zNEZ9L16a2U)

2) 藤井聡太二冠 8月21日インタビュー  
動画 (8分50秒前後に該当の表現がある)

<https://www.youtube.com/watch?v=zNEZ9L16a2U>

3) 将棋の藤井二冠、新パーツ購入を検討

<https://pc.watch.impress.co.jp/docs/news/yajiuma/1278287.html>

(青森公立大学講師)

## 会長断想

### 会長つれづれ考～Google 翻訳と英語学習

小川 貴宏

みなさんご存知の通り、オンライン上には Google 翻訳をはじめとした、無料の翻訳サービスがいくつかあり、多くの人が日々仕事に趣味に実用に、大変便利に利用している。Google 翻訳は、今世界で一番潤沢な資金力を持つ GAF A (ガーファ) と呼ばれる巨大 IT 企業群の一角を占める Google 社が、その資本と技術と情報力を余すところなく使って開発を続けている多言語対応の機械(AI)翻訳システムの一部をオンライン上に無料で公開しているものである。(無料で公開している背景には、社会貢献もあるが、人々がどういうものを何語から何語に訳したいと思うかという壮大なデータ集めという側面もある。)

私は Japan Times 紙の社説に注と訳をつけて半年に1度編まれる『ジャパントイムズ社説集』を毎期、2・3本ずつ担当させていただいているのだが、最近訳し終えた後、訳文に遺漏や解釈ミスがないかダブルチェックの意味で原文を Google 翻訳にかけることにしている。すると、その訳文の自然さと(悔しいことに)精度が、年々

目に見えて向上しているのに気づかされる。(ただ、社説レベルの凝った構造の英文では、まだまだ誤訳や切り間違いやごまかしや翻訳放棄(ただ単にカタカナに置き換えてすましている)などが多々見られ、追いつかれるのに今しばらくの猶予はあるかな、と少し安堵も感じている。)

さて、勤務先の大学の授業はこの4月から御多分にもれずオンラインとなり、他の大学が少しずつ対面授業を取り入れる中で後期も原則オンライン授業を続けている。今の学生さんたちは、物心ついたときから PC やインターネット、さらには携帯電話・スマートフォンが身近にある、いわゆる「デジタルネイティブ世代」である。彼ら・彼女たちは SNS、動画サイトや様々な情報収集に、またチケット予約やオンラインショッピングに、毎日何時間もインターネットを使いこなし、渡り歩いている。対面授業のころから、授業中スマートフォンの使用は禁止されているのに、注意しても気がつく(気を緩めると)スマートフォンに触っている学生さんも結構いた。

そんな彼らに英語を教える際に、Google 翻訳などのオンライン翻訳サービス、そして広くはインターネット上の情報は、いくつか罪作りな面を持っている。

1つ目は、英語を学ぶ *motivation* の問題である。これだけスマホなどが便利になってくると、もうスマホさえあればなんでもできるような気になってくる。彼らが日常的にコミュニケーションに使っているものに LINE (ライン) があるが、Google 翻訳ほど本格的なものではないようだが、LINE も「トーク」を使って「LINE 翻訳(通訳)」というサービスを提供していて、「LINE 命」である学生のみなさんはむしろ LINE 翻訳を(英作文などの課題にも)使っているようだ。また、LINE 以外にも、音声もつけて通訳してくれるアプリやサービスもいくつかあるようだ。こうなってくると、「スマホさえあればなんでもできるのに、何で英語を勉強しなければいけないの?」という素朴な疑問を持つようになり、これは英語教育の意義が問われる事態かもしれないのである。「電波が届かなくなったらどうするの?」と言っても、大震災などでも最優先で復旧される最終兵器的インフラをバックに持つ彼らは、スマホの電波が通じなくなる世界が想像しづらいようだ。

オンラインの情報や Google 翻訳などのサービスが持つもう1つの罪は、学生さんたちがまともに辞書を引いてくれなくなることである。オンラインの授業では、それぞれの学生さんが自宅などから授業に参加しており、なかなかパソコンの向こう側で彼らは何をしているかが(プライバシーの問題もあり)把握しづらくなっている。それで、授業中「この単語の意味を調べてみ

て」と言うと、恐らく PC を第1デジタルツールとして授業を受けている多くの学生さんは、彼らの(オンライン授業中は)第2デジタルツールであるスマホ上でインターネット上の検索窓、あるいは LINE や Google 翻訳の入力欄に「oo (英単語) 意味」と入れて結果を見ているようなのだ。出てくる答えは、2つの意味で、英語学習の面から困ったことになっている。1つには、極端に言うと「dog 意味」と入れると dog に関して一番頻度の高い意味、すなわち「犬」とだけ出てくる。ただ、辞書学的に言うと、「犬」という意味が知りたくて dog の意味を調べる人はあまりいないのである。教科書の英文の意味が、普段学生が1番に思い浮かべる意味とは違うから辞書を引かせるのだ。それを、たとえば「この文脈での *count* の意味を引いてごらん」と言うと1分くらい待たせた後(その間、教師は授業の間を持たせるのに四苦八苦する)ぶっきらぼうに、いかにも「言われたとおりに勝手にやったぞ」と言わんばかりにドヤ顔で「数える。」とだけ答えてくる。こちらは「重要である」という意味を発見してほしかったのに、1分待ってそれかい、とげっそりである。せめてインターネットでしらべるのなら、各ポータルや Weblio などの辞書サイトがあって、無料で引けるのに、と彼らに教えてあげても、辞書引きに慣れていないので、今度は2分かかってしまう。

2つめとして、辞書(特に多義語)を引いて文脈に合った意味を探す効用として、辞書のその語の *entry* を上から下まで見れば、英語のその語の(日本語の訳語とのずれを含めて)守備範囲をすべて知ることが

できる、ということがある。bill や charge、change といった基本語に、海外旅行や留学に行った際に役立つだけの複数の意味があるか考えてみればそれがわかるのではないだろうか。Google や Line 翻訳はとりあえず1つの一番ありそうな意味だけを刹那的に提示してくる。語彙習得の広がりがないし、いつまでたっても文脈の中での最適な意味を見極める力がつかないのである。やっぱり学生さんたちには、インターネットがどれだけ便利になっても、電子辞書、紙の辞書、Web 辞書、アプリ辞書のどれでもいいので辞書を引いてほしい。

デジタルネイティブである彼ら・彼女たちの方が SNS をはじめとして、はるかに私より digital literacy が高いので、また昨今の大学では学生はお客さんであり神なので、私もおとなしく「よく引いたね」とひとまずはほめてあげているが、内心将来英語を使う場面になって、またこの情報過多の時代に自分で情報を選択していかなければならないのに大丈夫か、といささか心配である。便利すぎるツールは、何も考えないで頼りすぎる（頼り切る）のも考えものである。

(成蹊大学教授)

## 名誉会長断想

### 「ことば」に関して安倍政権が残した罪—「忖度」の含意

奥津 文夫

憲政史上最長となった安倍政権が幕を閉じることとなった。この政権が残した功罪については識者達が色々と述べており、私にはそれについて語る能力はないが、言葉の研究者としての立場から一言述べておきたい。

安倍政権が国民に大きな不信を抱かれ始めたのは、2017年に森友・加計学園問題が発覚したのをきっかけに、首相や妻・昭恵氏に近い人物に対する「身びいき」やそれを取り繕わねばならないという政治家や官僚達の「忖度」が政権にはびこっているという疑念を国民が抱いた頃からであろう。

当時マスコミでも「忖度」と「改竄」という言葉が盛んに使われた。この2つはこ

れまであまり人々に馴染みのなかった言葉であるが、2017年の流行語大賞にはこの「忖度」と「インスタ映え」が選ばれたのである。

忖度の「忖」も「度」も「はかる」という意味であり、忖度は「他人の気持ちを推し量る」という意味であり、本来優しい心を表すものであり、日本文化の特徴とも言える言葉だと思う。しかし政治家などが「上司の意向を推し量る」「上役に気に入られようとしてその意向を推測する」という特殊な意味で使うようになってから「忖度」に不純な意味合いが加わってしまったのである。

日本外国特派員協会で行われた記者会見

では「忖度」は read between the lines や surmise などと英訳されたそうであり、その他 conjecture, guess などもあるが、どうもピッタリする語は見つからない。実際外国人記者達にはこの忖度という語の意味はよく分からないと言われたそうである。自分の意見はお互いにズバズバと言いつつ欧米文化とは異なり、相手の心中を察したり、思いやったりする文化の根強い日本ならではの言葉と言えよう。

私は「察しと思いやり」という日本文化

の素晴らしさを永遠に大切にしていきたいと願っている者であるが、安倍政権が「忖度」という言葉の含意や使い方を変えてしまったように思い、日本人の相手の心情を思いやる優しい心と情緒豊かな素晴らしい日本の言葉をゆがめてしまったことは、日本語を愛する人間として悲しく思っている。  
(和洋女子大学名誉教授)

## 参与随想

### コロナ禍四題

森住 衛

人間は何かを失ってみて、初めてその存在の重要なことに気がつく。このコロナ禍で、日常の状態の大半を「不要不急」とされた。たとえば、家族との外食、旧友との再会、映画鑑賞、本屋での新刊書探しなどである。カラオケ、仲間との飲み会、ゲームセンターでの遊興などはもってのほかである。これらは、確かに、手術、診療などと比べると多少は「不急」である。しかし、断じて、「不要」ではない。これらの不要不急な一コマ一コマにより、私たちはいろいろなことを得ている。友との雑談に知見を得た、沈む気分を発散できた、愚痴を聞いてもらった、疲れがとれた……。このように日常生活のどの場面もそれなりの意味がある。ということは、人生には不要不急なことは何もない。

人と会えなくなったことにも意味がある。

会えていないのに、いや会えていないので、却ってその人に心や想いが向く。そして、いつの間にか、その人を思い浮かべて対話をしている。詫びたり、礼を言ったりもしている。相手が言ってくれそうなことさえ思い浮かべる。これが何回もおこる。この現象は逢瀬がかなわなくなると余計に想いが募るのと似ている。また、仲間といるときに孤独を感じるのに対して、独りになると却って絆や連帯を感じるのと似ている。この空想の対話は、会うはずがなかった人たちや、物故者たちまでがこの対話の対象になる。これは、私の場合は、人生の晩年にあつて、そのうち人と会えなくなるといふ思いの反動かもしれない。とにかく、この3ヶ月は実に多くの「人に会っている」。

空想の対話の相手はコロナウイルスにまで及ぶ。「あなたは人間や動物の命を奪うた

めだけの存在なのか。あらゆる生物は食物連鎖など何らかの意味で他の生物の役に立っているはずだ。」 -- 「あなたたち人間も他の生物を殺めて生きているではないか。」確かに、人間は、他の生き物を「科学」という道具を使って、効率よく飼育し、殺戮して、自分の都合のよいように使っている。他の「種」を絶滅させたり、かれらの住む地球環境そのものを破壊している。私たちの生の営みや学問・研究などすべて「人間中心」である。コロナ禍はこの反省を促すための「天罰」か。かつて読んだカミュの『ペスト』に出てきた牧師のことばが交錯する。

最後に身近な現実への空想だが、学校教育をどうなるか、どうするか。オンライン授業では対面授業のようにいかない面が多

いことは周知のごとくである。しかし、この新たな方法にもよい面があるだろう。見聞や想像で言うならば、教材の提示が質量共に大巾に増やせる。反転授業もやりやすくなる。オンラインになってこれまで対面でいじめを受けなくなって安心している生徒がいる。何よりも、個別指導がやりやすい。一斉課題を与えている時など、教師は個々の生徒に家庭教師のようになれる。「命の電話」的なやりとりも可能である。教師の勤務条件が保障されれば、さまざまな指導や相談が、学校と校時という時空を超えておこなえる。リアル授業が主でオンライン授業が副という体制は、今後の教育制度としてあり得るかもしれない。

(大阪大学・桜美林大学名誉教授)

## 参与随想

### 日本語と英語の言語的距離は遠い、本当に遠い！

村田 年

私たちの日本語と英語との距離は、多くの英語教師や一般の人々が思っているよりもはるかに遠い。そのために、私たちが英語を習得するのは、想像以上に困難なのだ、というお話をしたい。

アメリカへの留学生のための英語試験である TOEFL の第 1 回テスト (1964 年) において、日本は参加 41 カ国・地域中 29 位、アジアでは 17 カ国・地域中 11 位であった。その後も今日に至るまで、いっこうに日本人留学希望者の成績は向上していない。

もうひとつの事例を大谷 (2020) によっ

て見てみたい。それはアメリカ政府の外務職員の語学力達成に要する訓練期間・所要時間を表したもので、カテゴリ 1～5 に分けられている。日本語はアラビア語、中国語、朝鮮語とともに最も困難なカテゴリ 5 に入っている。驚くべきことに日本語にだけ「注」がついている。「\*日本語は、中でもとりわけ困難な言語」と。最も習得困難な言語のうちの特に難解な言語とのレベルが張られているのだ。

これを裏返せば、日本人にとって英語は特に、一番難しい言語だとなる。事実、上

のカテゴリー5の言語訓練には2,200時間またはそれ以上を要するという。しかもクラスサイズは6名以下で、選ばれた語学堪能者のみだ。この訓練は、日本の大学の一般英語の授業に比べて、20倍以上もの精力を傾けていることになる。

日本語の堪能な外国人としてドナルド・キーン氏とエドワード・サイデンステッカー氏を思い出す。おふたりは戦時中特に選ばれて、米軍の日本語学校で2年半にわたって、毎日10時間もの厳しい日本語の集中訓練を受けた。キーンさんは雑誌・新聞に日本語でエッセイを書き、日本語で1時間でも2時間でも講演をされる。しかし、彼の翻訳を検討すると、日本人なら寝転んで読んでいてもわかる主語の省略を間違えたりする。

サイデンステッカーさんは、雑誌や新聞の原稿を英語で書き、日本人に翻訳してもらい、講演も英語でなされ、通訳をつけることが多い。彼は日本語の難しさにたいへん神経を尖らせているのだ。それでもやはり翻訳で日本人なら中学生でもすぐにわかる主語省略などを間違えたりしている。川端康成からはほとんどなにも言われたことはなかったが、一度だけ『伊豆の踊子』の最終場面で、踊り子と私（青年）とのことばを取り違えて、注意を受けている。

お二人ともエッセイにおいて、反省文を書いている。キーンさんは、「一生かかっても無理」、「何回も絶望する覚悟で29年間もやっているのに日本語の難しさに驚かない日は少ない」、「いくら考えても主語のわからないことがたびたびある」と書かれている。また、サイデンステッカーさんは、「よほど細心の注意をはらっていないとつい主語を見失ってしまう」、「片時も注意をゆるめてはならない」、「もっと気をつけるべきだった」と反省している。

キーンさんは日本語を自由に話されるが、やはり西洋人なまり（発音だけでなく）は抜きがたく、モンゴル出身のお相撲さんの方が気楽に聞ける。英語と日本語の遠さ、日本語とモンゴル語の近さがポイントだろう。

以上、英語と日本語の言語距離がいかにか遠いかを認識し、日本の英語教育もクラスサイズや1週間に何時間やるか等、本腰を入れて、根本的に考え直す必要があるとの提案である。決して日本の英語教師が能力不足で効果があがらない、生徒がやる気がない、のではないと言いたい。

参考文献：大谷泰照（2020）『日本の異言語教育の論点——「ハッピー・スレイヴ症候群」からの覚醒』（東信堂）

（千葉大学名誉教授）

## 特集

「コロナ禍における授業実践の報告」  
「近況報告」

## 実践報告

### 前期ライブ授業でのプレゼン発表会

新谷 真由

筆者の所属先では学生に Microsoft の利用権があり、個人 PC に Teams や PowerPoint (以下 PPT) をインストールできる。これを生かし、時事英語の授業でプレゼン発表会をすることにした。内容は他国紹介である。海外留学はおろか旅行もできない状況のため、少しでも気分が外向きになればと思った次第である。ただし G7 など誰もが知る国ではなく、調査が必要な国、すなわち新興国や途上国を選び、抽選で学生に付与した (ラオス、ジョージア、ケニア、ペルー、南アフリカ等)。受講者 18 人で 18 か国となった。

学生は、①所在地と首都、②民族や宗教構成、③主要産業、④観光名所、⑤文化、⑥ワイルドカード (調査して面白いと思ったこと) から 4 項目を選び、ストーリー・テリング形式で、各項目に 1 枚以上のスライドを作成する。学生はスライド 1 枚に 1～2 文程度の英語を書き、内容に合う画像をネットで拾い貼り付け、最後のスライドに画像の出典先を明記する。書いた英文は全て読んで録音し、スライドに貼り付ける。プレゼンは各自がスライドショーで音声とアニメーションを再生する録音再生方式で

あるが、3つの利点を見込んだ。すなわち、当日通信状態が悪い際は教員が代理で再生できること、繰り返し録音が可能なためベストな発音が披露できること、教員が成績をつける際に何度も聞けるため正確な評価を下せることである。学生には、発音の明瞭さ、英文と画像の一致度、独創性、聴衆への配慮の有無 (難語に注を付ける等)、飽きさせない工夫、形式の 6 つを各 5 点で評価すると伝えた。授業の軸は時事英語のため、学生は授業外で作成し、隔週の授業後半時を個人指導にあてた。Teams に学生用チャンネルを作り、PPT 画面を共有してもらい、進捗の確認、PPT 操作の支援、英文添削をした。

発表会は 2 回の授業で行った。学生は Teams に不慣れなため、予め独自に作った発表手順マニュアルを熟読させ、不安な場合は教員と前日にリハーサルするようにした。当日は懸念通り、通信事故や学生の操作ミスが起きたが、教員が学生の下承を得て代理で再生したため、学生の焦りを最小限に抑え、かつ場の雰囲気を壊さず進行した。聴衆には Excel シートを渡し、各発表の「良かった点と改善できそうな点」を都



度入力させた。シートは教員が回収して匿名化し、翌週に発表者に返却した。発表者は皆のコメントを見ながら振り返りを書いた。「オンライン授業でPPTを作るものがなかったので、真剣に作ることができた。」「調べた情報は簡単に短くまとめ、わかりやすく英文にする力や写真の配置を工夫することが身に付いた。」「みんなから『分かりやすかった』や『綺麗だった』などの意見を貰ったので、そういう点は忘れずに今後も活かしていきたい。」「一番は自分一人でも英語でパワポを作れるということ。も

ちろん先生に助けて頂いたがこれが今後の自信につながると思う。」「聞き取りやすい音になるように何回か録音し直しました。」

「コロナでどこも行けない状態なので、他の学生さんに少しでも旅行の気分を味わってもらいたいので観光地を多く紹介しました。」などあった。

後期は日本文化をプレゼンする。オンラインという利を生かし、海外の知人を発表会に招く予定である。学生は目下、資料作りに勤しんでいる。

(文京学院大学准教授)

## 実践報告

### コロナ禍での日本語学校オンライン授業の実践と課題 —ゼロ初級学習者の外国語学習のオンライン利用—

横田 葉子

2020年4月コロナ拡大のため来日できなくなった留学生のために筆者勤務の日本語学校ではZoomによるオンライン授業を始めた。来日までの臨時的措置として始められたオンライン授業も長期化するにつれて問題が生じてきた。①対面授業の代替授業という位置づけであるため、1日の授業数が長時間である。学習者の集中力が持続できない。②ゼロ初級クラスであるが媒介語なしの直接授業であり非言語コミュニケーションもほとんど使えない。学習者が内容を正確に理解することが困難である。③双方向授業であるにもかかわらず20名以上という多人数である。④理解度の確認のためのテストの手段が限定される。

以上の問題点を踏まえ、授業の質、学習

者の満足度、効果の3点から授業デザインを変更した。①週に2日は完全にグループ学習(能力により2グループに分ける)、②教科書の内容のポイントを絞る。③授業理解が遅れている生徒に対する補講、さらに具体的な方法として、

④一人の学習者に対応する時間を対面授業より増やす。音読ではひとりにより多く読ませる。一見非効率的にも思えるが、1日(当校は1日の学習時間は4.5時間。)で考えるとそうでもない。また、ひとり1問の答を答えさせるのではなく質問を展開させて、学習者—教師間のやりとりを4~5往復以上に増やす。学習者に教師との双方向の授業であるということを印象付け、積極的に支援を求める生徒には手厚い対応をす

る。⑤Zoom の機能を十分に利用する。動画等も取り入れ Visual 的に印象付け授業に緩急をつけ集中力を持続させる方法を考える。⑥評価方法を工夫し口頭試験を増やす。

改めて対面授業の良さ、またオンライン独特の良さにも気づかされる。①教室という雰囲気が授業に影響を与えているということに気づく。教師にとって、教室での対面授業は、非言語コミュニケーションを用いることのみならず、学習雰囲気をも利用することができるということである。理解が十分でない学習者に対しても、教室（クラスメートがいる）の雰囲気で理解の方向へもっていくことが可能な場面もある。②クラスメートが周囲にいることをあまり気にせず学習できるオンライン授業の方を好む学習者がいることにも気づかされた。教

室授業では目立たない、声も小さい生徒がオンラインでは、その短所が目立たない。

③オンラインというよりデジタルな方法は授業に効率性をもたらすこともわかった。

自律学習ができる学習者は教師と自分をつなぐオンラインを上手に使い、対面授業以上の効果をあげることができる。教師にヒントをもらって自分で学習を展開させることができる人は大きく成長できるのもオンライン授業のひとつの利点である。

オンラインも含めデジタル語学教育産業市場は今後大きく伸びると予想されている。この危機をチャンスと捉え、デジタルに対応できるスキルを磨き今後コロナ後も継続されるであろうオンライン授業に対応できるように備えたい。

(淑徳日本語学校)

## 近況報告

### 近況報告—コロナ禍において—

池田 和夫

3月に始まった新型コロナウイルス禍により教育現場も大きな影響を受けた。私は4月から職場を離れることになった。しばらく非常勤講師を続けるつもりだったが、4月から5月にかけて緊急事態宣言、県立高校も一斉に臨時休校に入った。教諭、非常勤講師を合わせて延べ8校、45年間に及んだ。教科指導、ホームルーム担任の他、総務、教務、生徒指導、進路指導、国際などの分掌もあり、バレーボール部やESS部の顧問も引き受けた。

ALTの受け入れも担当した。来日前のE

メールのやり取りから空港での出迎え、学校に案内し辞令交付、市役所での手続き、銀行での口座開設、不動産を通してアパートへの入居の手伝いなど。また出校してからは特別時間割により Team Teaching の実施。帰国時も同様の手続きがあった。現在はALTの扱いも難しくなっている学校もあるようだ。

国際交流活動ではCIEE（国際教育交換協議会）の日米高等学校交流プログラムとして生徒を引率して米国の姉妹校に1か月ほど行った。全国の引率予定者がオリンピ

ック記念青少年総合センターでのオリエンテーションに参加、資料を各校に持ち帰って参加生徒、保護者を対象に説明会を開いた。空港の見送りが済むと添乗員もなく生徒12名と出発。現地に着くとホストファミリー、姉妹校の担当教員と対面し、生徒と同様にホームステイ先へと向かった。生徒たちは受入生徒と一緒に授業に参加、日本文化紹介のための特別授業を組み入れてもらった。同様のプログラムはオーストラリア、ニュージーランドの学校とも行った。NPO 日本国際理解推進協会(Japiu)を立ち上げてもらい、直接、姉妹校・交流校に生徒を派遣できる制度も作った。このような短期交換留学も、それぞれの学校で長年続いた。しかし今年度は新型コロナ禍でできない。いつ再開できるのだろうか。

辞書の仕事は、読書会を行なっている岩崎研究会に入れてもらった時に協力を依頼され、1984年に『英和辞典初版』が出来上がった。その後5~6年ごとに改訂版が完成した。新しい情報を追加し、古い情報を削除する。言語学の成果を新機軸として取り入れる。語義の展開、単語の記憶、日英語義比較、文型表示、コロケーション、挿絵など。現行の第6版も追加すべき情報も生まれるので改訂が必要になる。「辞書は造ら

れた日から古くなりつつある。」と英和大辞典の編者は巻頭言で述べているが、切りのない作業だ。

この学会では、単語の習得に「語根」、「接頭辞」、「接尾辞」が有効であることを発表させていただいた。例えば、**collaboration**はcol(共に)+labor(労働)+ation(すること)から「共同作業」となる。これは上記の機軸の1つである「単語の記憶」を発展させたものだ。昨年『語根で覚えるコンパスローズ英単語』を出版させていただいた。コロナ禍で職場から離れてしまったこの機会にこの続きを考えてみたい。通時的な語義の順序は共時的な語義の頻度順とは逆になってしまって辞書の中では扱いにくい場合がある。例えば、**volume**は歴史的には「巻物→巻→量→音量」の順であるが、辞書の本文では順序が逆になるであろう。紙の辞書、電子辞書の利用が減り、改訂作業には逆風が吹いているようだが、ウィズコロナの時代、ニューノーマルが求められる時代にこそこのような研究が続けていければと思っている。

(元千葉県立高等学校教諭)

## 座談会「遠隔授業における工夫」

2020年9月19日(土) 15:00-16:30

オンライン開催 (Zoom)

司会：馬場千秋副会長

参加者：22名

### 報告

## オンデマンド授業の体験から

木村 郁子

非常勤講師という職業柄、今回のオンライン授業ではさまざまなシステムを各大学で使った授業となりました。一番やりやすかったのは、Zoom と Google Classroom を組み合わせた授業で、Zoom などのリアルタイムで顔を合わせての授業は、教室での授業とほぼ変わらず、知識の伝達やグループ学習などができたと思います。問題だったのはオンデマンドの方で、成果や満足度は学生ひとりひとりの学習習慣や、学習能力に大きく作用されると思いました。私の場合、毎週授業時間のある日の朝に課題を配信して、次の週の授業日の前日の夜までに提出してもらうというサイクルで、出席をつけ、成績をつけて行きました。そこで気が付いたのが、配信されたものすぐに掛かる学生と前日までとにかからない学生に、どこの大学でも分かれることです。そして皆さんが想像されるように、すぐにとりかかる学生の成績の方が良いことが多いのです。授業の中でオンデマンド授業の是非について意見を交わしてもらったことがあります。それによると、オンデマンドの方が良いと答える学生は、タイムマネジメントが上手でした。彼らは自由

に自分の好きな時間に学習することが出来、通学時間も節約できて、その分趣味や運転免許の取得などに時間を使えたというのです。彼らはしっかり学習時間を計画していて、いつ課題をするか決めています。また一人で資料を読んで理解する能力もありました。それに対して、オンデマンド授業に反対の学生は、やる気にならなければ課題にとりかからないようでした。毎日一人で山積した課題に立ち向かい、わからないこともあり、教師に質問してもすぐに返事になかったり、フィードバックがないことがあると孤独を感じ、モチベーションが下がってしまうようです。そうすると中々学習を続ける気にもならないで、ますます課題がたまるという悪循環になるようです。人の学習スタイルには色々ありますが、オンデマンド学習は、一人で計画を立てて、一人で学習する習慣のある学生には都合が良かったようです。それに対して、人から聞いたり、他の人のすることを真似たり、体を動かして試行錯誤をすることで学ぶ学生には、そのような機会がなくなり、辛い状況だったようです。このような学生には教師の方から色々コンタクトをとらなけ

ればならないと思います。毎回の課題に対してのフィードバックはなるべく早く、ほめる言葉を多くするとモチベーションがあがるようです。また学生からのメール対応も迅速にしてあげることで、孤独感を少なくすることもできるようです。教師の方も押し寄せる課題チェックの波にのまれつつ、オーバーワークもよいところですが、学生同士のつながりがない分、学生と教師との

関係の方が対面授業の時よりも密になるように思いました。

個人の学習スタイルが異なるのだから、それに合った様々な教育方法があつて良いのかもしれない。コロナと言う状況で、いつも一律に同じ教育を施してきたありように変化が生まれ、これから多様な教育方法を選択できる時代になるかもしれません。

(千葉大学非常勤講師)

## 報告

### オンライン授業での成績付けについて

瀬上 和典

本稿では、オンライン授業の成績付け(Grading)において私が行った工夫を2つの事例とともに紹介させていただきます。この工夫とは、対面授業をオンライン上で再現しようとする際に問題となりうる要素を避け、学生が能動的に取り組めるよう動機付けすることに資する期末課題を設定することでした。

事例となるのは理系国立大学1年生向けの基礎英語と2年生向けのリスニングの授業です。肝心の期末課題ですが、1年生向けの授業では「本や読書についての名言集」から引用した英文を出題しました。学生は出題された英文の構造や文法事項についてできるだけ詳しく記入し、翻訳も作って提出します。辞書や翻訳アプリを使うことを許可し、最終授業日の授業時間を課題に取り組み時間(制限時間)として設定しました。

2年生向けの授業では、教科書として朝日出版社の『スティーブ・ジョブズ 伝説の

スピーチ&プレゼン』を用いました。期末課題として、授業で扱った範囲の本文の音読を課しました。学生は授業で扱った範囲から任意のページを選び、授業で確認したポイントに注意して音読し、その音声をスマホやパソコン等の機器で録音して提出します。

どちらの授業も、こちらの意図(学期を通じた学習目標)が明確に学生に通じるように、すべての授業回で期末課題と極力同じ形式の演習を行ってもらうことで、「最終的に何ができるようになるのか」を具体的にイメージしてもらうよう設計しました。

期末課題という「成果物」で成績を付けることには、大きく2点のメリットがあると考えています。1つは出欠管理の負担を減らせること、そしてもう1つは、オンラインと相性の悪い種類のテストを避けることができることです。

同時双方向型の授業において、通信容量の問題やプライバシーの観点から学生に対

してビデオのオンを強制しないよう要請する大学もありました。また、学生が欠席しているときに、本人の自己管理の問題なのか機器の不具合等の不可抗力によるものなのか判断が難しいこともあります。しかし、授業内容を強く反映した成果物を提出してもらうことによって、どれほど熱心に授業に取り組んだのかをその成果物によって間接的に測ることができます。実際に私は出欠をとりませんでした。欠席率はとても低かったと記憶しています。

テストに関して、教科書の語彙や内容を復習的に問うものと、オンラインで実施する場合にはカンニング防止策が限られ

てきます。しかし、英文の構造を明示したものや、ネイティブの発音をお手本にした音読の音声を出してもらった課題であれば、そもそも絶対的な正解はないのでカンニングのやりようがなく、また一夜漬けでどうなるものでもありません。

もちろん、提出された課題が学生本人によって作成されたかどうかまで完璧に確認することはできませんし、このような成績付けが本当に効果的なものかは検証の余地が大いにあると思いますが、オンラインでのテスト作りや成績付けの新しいアイデアの一助となれば幸甚に存じます。

(東京家政大学非常勤講師)

## まとめ

### トピック 1: 授業運営

学期開始直後は特にサーバーダウンなど学習管理システム (LMS) やネットワーク関連のトラブルが多かった。また、オンデマンド教材のアップロードなど、対面授業よりもはるかに長い授業準備時間が必要になった。

オンライン授業における問題点として、学生間のコミュニケーションの取り方が挙げられた。諸大学によるオンライン授業に関するアンケート結果によると、総じて1年生の授業満足度が低く、友人が一人もできず孤立する学生が多くいた。そのため、授業内では必ずブレイクアウトセッションを設けたり、共同学習やグループプレゼンテーションを取り入れたりして、オンラインでも互いの交流を深められる場を提供した。また教員の指示により、学生たちも SNS でグループを作り資料を共有したり、授業外

でも自発的にオンラインで集まりスピーチの予行演習をしたりすることで、互いにコミュニケーションを取りながら学習することができた。

一方、オンライン授業による利点もある。オンデマンド授業では、授業動画を好きな時に何度でも見返すことができるため、特に難易度の高い授業を履修する学生たちの満足度が高かった。ただし、自分で勉強する癖がついていない学生たちにとっては学習が進めづらかったようである。

### トピック 2: 学生対応

学生とのやりとりは、メールや LMS を通してスムーズに行うことができ、対面授業の時よりも密に連絡を取ることができた事例もあった。ただし、やはり対面ならば学生に気軽に話しかけられるが、オンラインだとどうしても距離感を感じることも多か

った。特に、精神的に不安定な学生に対するサポートには工夫が必要だった。教員側が努力して手を差し伸べる必要がある。

また、スマートフォンしか持っていない学生も少なくないため、資料作成には十分な配慮が必要であった。

### トピック 3：試験、評価

単語テストや正誤問題などの単純な問題、暗記問題などは、オンラインでの実施が難しかった。LMS を利用し、選択肢をシャッフルして出題しても、正答率がかなり高くなってしまった。その一方、文章題・プレゼン・エッセイ・レポート問題を出題すると、細かいループリックに基づいて評価しようとしても厳しく採点することができなかつた上、採点にかなりの時間を要した。

また、オンラインでの試験で問題となってくるのがカンニングである。試験時間が20～30分越えると、教科書を見たり情報交換したりする学生が出てくるため、10分程度の短時間で小テストを行ったり、教科書に答えが書いていないような実力テストを行うことでカンニングを防止した。実際、前年までと成績結果はあまり変わらなかった。今後、情報の検索はAIに取って代わる

っていくため、暗記問題など知識の有無を問う問題ではなく、授業中に扱ったものを実際に使う能力を測る試験を実施することが重要になってくると考えられる。

### トピック 4：学校以外でのこと

学習塾でも、緊急事態宣言前後はオンラインでの授業を余儀なくされた。メールやLMS、アプリを用いて授業を行ったが、実際にオンライン授業を実施することができたのは幼稚園年長以上に限られた。大学での事例と同様、事業準備にはかなりの長い時間を要した。

オンライン授業によって、不安を訴える生徒が多かった。やはり、対面授業の方が臨場感だけでなく、安心感も大きいようだ。特に、初めて小学校に通う小学校1年生・初めて中学校に通う中学校1年生・高校受験を控える中学校3年生の間でオンライン授業の評判が良くなかった。ただし、英検がオンラインで受験できるようになったりと、コロナ禍によって良くなった側面もあった。

## 事務局だより

### 1. 会費納入・名簿整理について (重要)

既に納入をしていただいている方もおられますが、まだの方は会費の納入をお願いいたします。

一般会員 4,000 円  
学生会員 1,000 円 (院生を含む)  
賛助会員 8,000 円

振込先銀行口座：三菱 UFJ 銀行  
国分寺支店 普通 0132870  
口座名：日英言語文化学会事務局  
\*\*\*\*\*

本学会では会計事務の合理化のため、2020 年度より会費納入は銀行振り込みに限らせていただき、大会あるいは定例研究会の会場での受付は行いません。ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、お振込みにかかる手数料は会員のご負担となります。

お振込み時に発行される「控」が領収書に代わるものとなりますので、領収書は発行いたしません。研究費処理などで問題が生じた場合には、本学会 HP の「会則」第 5 条をご覧ください。

<http://language.sakura.ne.jp/ajelc/doc/kaisoku.pdf>

書面での領収書が必要な場合は、事務局までお問い合わせください。

### 2. 名簿記載事項について (重要)

名簿記載事項に変更がある方は、事務局までお知らせください。特にメールアドレスを変更されている場合は、すぐに事務局 (ajelc@hotmail.co.jp) までお知らせください。事務局から案内や Newsletter をお送りするたびに、宛先不明で戻ってきってしまうメールが複数ございます。ご本人からお申し出がない限り、新しいアドレスにお送りすることができません。どうぞご協力のほどよろしくお願いいたします。

### 3. 第 75 回定例研究会

第 75 回年次大会を次の要領で開催いたします。

2020 年 12 月 12 日(土) 14:30-17:00

Zoom にて開催

内容

14:30-14:40 会長挨拶

14:40-15:40 講演 1

「ジェンダーと英語教育」

石川有香(名古屋工業大学教授)

15:40-15:50 休憩

15:50-16:50 講演 2

「日本の英語教育を問い直す 8 つの異論  
—英語教師 50 年の不安とその解決の試み—」

森住衛(大阪大学・桜美林大学名誉教授)

16:50-17:00 諸連絡

17:10- Zoom 上での懇親会



#### 4. 定例研究会での発表者・講演者募集

定例研究会での発表者および講演者を  
随時募集しております。自薦他薦は問いま

せんので、事務局までお知らせください。

なお、発表は会員の方に限ります。

#### 会員執筆の書籍出版のお知らせ

会員による書籍が出版されました。

・石川有香編 『ジェンダーと英語教育 —  
学際的アプローチ』 大学教育出版, 2020  
年 6 月 ISBN: 4866920815

書籍を出版されましたら、広報通信委員会  
までお知らせください。掲載する内容は、  
書名、執筆者、出版社、ISBN あるいは

ASIN 及び価格とさせていただきます。

#### 編集後記

今回も先生方のご尽力を賜り、Newsletter 60 号を発行することができました。発行が遅くなってしまい、ご執筆いただいた先生方にはご迷惑をおかけいたしました。学期初めのお忙しい中ご協力くださり本当にありがとうございます。先生方の原稿を拝読し、コロナ禍を機に教育のあり方が大きく変容する中、教育と言語文化についても一度考え直さなければならないことを痛感いたしました。この冬は、COVID-19 とインフルエンザの Twindemic となる恐れがあると言われておりますが、皆様どうかくれぐれもご自愛ください。

(R.A.)

AJELC Newsletter 第60号

2020年11月18日 発行

発行人：小川 貴宏

編集：日英言語文化学会（AJELC）広報通信委員会 水澤祐美子・江連敏和・山崎千春・青木理香

発行所：日英言語文化学会

（〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1 帝京科学大学 馬場千秋研究室内）

E-mail: ajelc@hotmail.co.jp